永久革命
第五号
1958・12・29
定価五十円
〈編集・発行〉
トロツキスト同志会
千葉県四街道区
内小深74

国際主義共産党（第四インター・日本支部準備会）結成大会議案（一）

綱領並びに当面の組織活動方針

トロツキスト同志会

一、日本トロツキスト運動の諸段階
二、当面の組織活動方針（附録）
一、規約草案
二、パブロの手紙

一、日本トロツキスト運動の諸段階

(1) 山西英一氏の孤立した奮闘の時代

軍部独裁の鉄の枠の中で一切の大衆運動が絞殺されていた戦時中に山西氏はトロツキスト運動の至験と貴重な諸文献を伴って西欧から帰国した。山西氏は戦后トロツキズムの紹介とその政治的方針をもちこむために必至の努力をかさねた。こうして一九四九年から一九五二年までに、裏切られた革命、ロシヤ革命史、中国革命、次は何が、などの諸文献が刊行され、次の時期のトロツキスト運動の発展に大きな影響をあたえた。

山西氏は一九五〇年にはじめて第四インター国際書記局と連絡をとることに成功した。五一年の第三回大会は日本のトロツキストは社会党に加入すべきことを決定したが、山西氏はこの方針に従って左派社会党（五一年秋分裂）に入党し、その中で加入活動を開始した。

山西氏と第四インター国際書記局との関係については一つの特殊な事情を説しなければならぬ。山西氏と国際書記局（以下ISと略称する）の連絡はISの中国人メンバーである同志彫述之（中国共産党創立者の一人、一九二九年以降陳独秀と共にトロツキスト運動の指導者、五〇年以降ISに入る）を通じて行われてきた。だが一九五二年にはIS内部で主としてフランス共産党への加入戦術をめぐって対立が生じ、同志彫はISから実質的に排除され、このために山西氏とISの関係は一時中断した。しかもこの対立は一九五三年春から夏のアメリカ支部（SWP）内部の対立とかりんでついに同年秋の大分裂へと発展した。国際執行委員会の多数派（同志彫をのぞくIS全員、スイスを除くヨーロッパ選出の国際執行委員全員、ラテン・アメリカ選出の全員、セイロン選出の二名、この多数派を少数派はISの同志パブロの名で呼んでいる――パブロ派）はISの周囲に結集し、少数派（アメリカ選出の三人、スイス支部の一人、英国支部の一人、同志彫）はSWPの周囲に結集し、国際委員会（IC）を結成した。この分裂は根本的には第三回世界大会によって確認された決定的質的変化――プロレタリアートに有利な――と、それに伴う長期的加入戦術を実行しようとする多数派と、それに反対する少数派のはげしい斗争の表現であった。情勢の質的変化を見ることのできない少数派の誤謬はとくにマッカーシーズムの重圧下にあったアメリカにおいて鋭い性格をとった。こうしてSWPの少数派（コケラン派）は解党主義へとすすみ、第四インターをはなれ、多数派（キヤノン派）は第二次大戦前の方向決定を固執するセクト主義へとおちこんだ。

この分裂が日本に知らされたとき、山西氏は直ちにIC（キヤノン派）を支持する旨同志彫に声明した。だがこれは山西氏の個人的声明にすぎなかった。他の同志たち（一九五二年頃より若干の者が運動に参加した）はそれについて何も知らされておらず、キヤノン

派がボイコットした第四インター世界大会（五四年六月）についても山西氏は全く黙殺した。それゆえに、この時期の我が国トロツキスト運動の一方ではISとの連絡が切断され、他方では山西氏の所属したICは何ら国際活動の中心に持たず、実質上ICを各国共産党の連合体にする誤った社会民主主義的組織方針に導いたために、インターナショナルの指導とその政治活動への参加を不可能ならしめたのであった。

(2)、社会党内での活動（一九五三～五六年）の時期

講和条約をめぐる党内斗争の結果社会党が分裂し（五一年秋）し、更に五三年には全労が総評から分裂するという過程の中で、労働階級の左翼化は殆んど完全に左派社会党というみぞを通じて表現された。山西氏は左派社会党三多摩支部に加入して活動をはじめた。五二年にはI、Kらが山西氏の指導下に社会党内で活躍しはじめた。Iは三多摩支部で、Kは青年部で。

最初の成果は青年部から生まれるかのような様相を呈した。五二年十二月に社会党青年部有志の手で発行された「若い同志」の一号には平和運動への疑い「ソ連はどこへ行く？」「エジプトの危機とプロレタリアート」などの明らかにトロツキスト的な方向を示す諸論文がけいさいされた。五三年に社会党青年部機関紙「若い群列」の中で、もちろん社会党の枠の中で、ではあるが、スターリニズムに対する一定の批判が展開されるに至った。同紙十三号の「東独六月革命と社会民主主義者の立場」、「ソ連は平和勢力であり得るか」、十四号の「ブルジョア連立政権かプロレタリア政権か」、「高野実氏への公開状問状」などがそれである。これらの論文は左社内部の高野派を鋭く刺戦した。彼らはトロツキストの見解（当然それは百％トロツキスト的な内部においてではなく、己れを得ない社会党官僚への譲歩を含んだ形で出されたが）を反ソ反共と曲解してこじつけ、このようにしてトロツキストを排除するに至った。これは五三年十月であった。これによって青年部内のトロツキストの発展の可能性は断ち切られたのである。当時の主要な政治問題は国際的には東独六月革命、国内的には重光首班問題に中心的にあらわれた民族革命と社会主義革命の綱領論争、秘密大会の平和勢力と第三勢力論争の諸問題であった。この時期にトロツキストが百％トロツキスト的な出版物を持っていなかったことがこれらの諸問題の討論を通じて左社内部のヘゲモニーを高野派に完全にひきわたすための条件となった。なぜなら、独立トロツキスト機関紙がないために、我々はたとえば暴力革命、ソヴィエト政府、労働者国家擁護などの原則的立場を党内で打ち出すことができずにもしそうしたら直ちに党そのものから排除されるであろう）、それゆえに高野派的中間主義を左から批判する余地を非常に狭められていたからである。独立機関紙でなくとも、せめて社会党左翼分派機関紙でも当時我々の手で発行することができたならば、我々は左へ進みつつあった労働者を完全に高野派的潮流に凝結せしめることを部分的にもせよくいとめ、一定のトロツキスト勢力を社会党内につくりあげることができたであろう。他方では五二～三年当時のトロツキストの政治的経験と成熟はきわめて貧弱であった。この欠如が独立活動の完全な欠如によって加速され、加入活動の成功を阻止したのである。

五三年末頃からは山西氏、Iらの三多摩支部内における活動が一定の成果を生みだしはじめた。五四年初頭に重大化した造船疑獄とそれによって生まれた政治危機の中で、トロツキストは三多摩支部の中のヘゲモニーを確保し、大胆に革命のコースを党内に提起した。五四年中の三多摩ニュース、組織綱領草案討論のための参考資料（五四年六月）、合同問題について（五四年八月）などの諸文献は加入活動としてはすぐれた仕事として評価しなければならぬ。だが、それにも拘わらずこの活動は五五年以降の安定期の中で衰退し、何ら顕著な組織的成果を収めることなしに終った。この事実はまたもやトロツキストの独立活動の欠如という焦眉の問題を提起するのである。山西氏は執拗に独立活動の必要を否定し、或いはその時期尚早を力説した。彼は加入活動を通じて革命的政治方針のもとに広汎な戦斗的社会党労働者を大衆的に左へ押し進めるという正しい道を実行しながらも、トロツキストの独立活動が一貫してつづけられぬかぎりその成果を体系的に取り入れることはできないということを見ようとしなかった。この誤謬のために、五四年を通じて獲ちとられた社会党でのトロツキストの政治的影響力は、社会党統一とともに何の結実もなしに消え去ったのである。五七年はじめに唯叫び（ゆいきょうび）という社会党内分派機関紙が二号だけ出されたのをさいごにして、社会党内でのトロツキストの体系的活動はおわった。

(3) 独立活動のための準備 ――とその開始

社会党加入活動の経験をきそにして、トロツキストの独立活動をはじめなければならぬ、という問題がK・Tによって一九五四年に提起された。山西氏はこれに反対した。五四年十一月、東京でひらかれたアジア社会党会議にオズザーバーとして出席したLSPのコルビン・デシルバと山西氏、K・Tの間でこの問題に関して短時間の討論が行われた。だがここでも事態に何らの改善も与えられなかった。K・Tは社会党を脱退して、独立のトロツキスト活動を組織するためのイニシアチブをとった。幾つかの失敗に帰した試みがなされたのち、一九五六年の夏、K・Tのグループは、ISからの最初の連絡を受けとった。就中五六年十月二十日のIS書簡は最的的にトロツキスト内部の論争問題を解決する基盤を与えた。この書簡は、一国の

の中で革命党を樹立することは不可能であり、日本のトロツキストの最初の任務はインターナショナル日本支部を確立し、百％トロツキスト的な独立機関紙を発刊しはじめることである、と規定している。この原則問題を解決したのちに、戦術問題として社会党への加入の方針をとるべきである、とISはのべている。直ちにこの書簡をキソとして、トロツキストの内部で討論が組織された。山西氏はこの討論を拒否した。その理由は明らかにされなかったけれども、その後に分つたように彼はキヤノン派に属しており、それ故にISを正統トロツキズム組織とはみとめなかったのではないかと推察される。こうして、五六年十月には日本支部準備会が発足した。そのメンバーは八名であった。この人々はすべてどの党にも属しておらず、どんな大衆運動にも活動家として参加していなかった。この欠陥はやがて運動に否定的影響を与えるであろう。山西氏が支部準備会に参加せず、むしろそれを白眼視した理由の一つは我々の組織のこの小ブル的構成であった。それにも拘わらず決定的要因は正しい方針であった。五六年末には山西氏のグループの方が一万労働者的であり、大衆運動に根をもち、より活動的であった。彼は冷然と我々のグループによる独立活動のための努力を傍観していた。その構成の弱さのゆえにやがて崩壊するであろうと期待しながら。

・実質的には「反逆者」6号（五六年十月）から日本支部準備会は公然と活動しはじめた。「反逆者」9号（五七年一月）は日本トロツキスト連盟の機関紙として発行された。これは五八年九月まで「世界革命」と改名して続刊されている。この独立活動の中核であるトロツキスト機関紙の発行は当初の小さなグループの全精力を吸収した。五四年の一時期に達成された高い水準の政治的宣伝煽動という加入活動に比較すると、最初の独立活動の一面的な欠陥が確認される。独立機関紙は最初の段階においては殆んど飜訳で埋められていた。だが、このように局限され、孤立した運動であるとはいえ、まず独立活動をはじめることなしには次への第一歩をふみ出すことはできなかったであろう。この最初の第一歩で五六年末～五七年初頭にふみ出された。それは「反逆者」十一号（五七年二月十五日）に発表された「世界革命の一環としての日本社会主義革命」という綱領的文書の中に集中的に表現されているということができる。

(4) 第五回世界大会に向けて。

大会は五七年十月にイタリーでひらかれた。日本準備会はこの大会予備討論に参加した。大会の三つのテーゼ草案は機関紙に発表された。

この討論の中でUはソ連が労働者国家であるというテーゼに対し反論を加え、この論争はUの分裂となって終った。その後、Uは対馬忠行の小グループと結びついた。しかしこの論争はUの分裂の後も解決されず、くすぶり、五八年になって新しい形で爆発することになる。

世界大会は日本を第準備会の意見を聴取したのち、日本の組織は直ちに綱領討議にとりかかり、それを決定しなければならぬ、その綱領を検討したのち、IEC（国際執行委員会）に日本支部の承認を決定するよう委任する。加入戦術の具体的方針については日本代とISの討論によって正しい方向を与えていく――ということを決定した。

世界大会後、ISと日本代表の数次に亘る討論の中で、加入戦術については次のように決定された。日本の組織は社会党加入戦術をとらねばならぬ。当面の共産党内加入戦術によって一定の基幹部が獲得されたのちには、社会党へと方向を転換しなくてはならぬ。

(5) 学生共産党員の急速な左翼化

五五年の六全協以後、共産党内の動揺は五七年の末から五八年の初めにかけて頂点に達した。この段階でトロツキストの任務は、単に独立活動の旗をかかげつづけるだけではなくて、一歩進んで柔軟な戦術で共産党内の広汎な分子を政治的影響下おくような政治的機動を実施することであった。このとき我々はちょうど山西氏が指導していったと同様な広汎な政治闘争を行いうる条件下にあったし、更らにこんどは独立活動の武器を持っていたのであるから、そこから真実の組織的成果をくみとることができた。

共産党の動揺は学生の中に典型的にあらわれた。それゆえに、我々の宣伝を学生に集中し、我々の共産党内にいる分子は大胆な政治的宣伝扇動によって動揺する党大衆を左へ押しやる任務を果さねばならなかった。この任務は関西の同志たちによってみごとに達成された。彼らはまず広汎な党大衆を政治的影響下におき、次にこの影響を組織的に刈り取った。このようにして五八年中を通じて、関西には堅固な、しかも学生運動に根をおいた独立トロツキスト組織が結成されるに至って至ったのである。

この事情は東京では著しく異っていた。学生の一般的左翼化にも拘わらず、五八年五月ごろまでは共産党内で政治的機動を駆使しうるトロツキストは関西にいるだけであった。東京の共産党内のトロツキストは、彼らの任務を正しく理解してもいなければ、まして正しく実行することもできなかった。彼らは機動を取り引きにすりかえた。この事情のゆえに、東京における学生運動内部のトロツキストのヘゲモニーの確立は全く立ち遅れざるを得なかった。ようやく五八年七月以降、東京でも共産党内、主として学生細胞内部での政治的宣伝の努力が開始された。だが、日共七回大会を境いとして共産党内の情勢は一変した。党内論争は終結させられ、官僚的一枚岩至上主義がはげしい勢いで復活してきた。この情勢の変化は学生の左翼の相当部

分を理論的にも組織的にも極左へ向わせる傾向を促進したのであるが、この傾向は東京においてトロツキストのヘゲモニーの確立が立ち遅れたために特に鋭くあらわれることとなった。

(6) 極左セクト主義グループの発生とその分裂

五六年十月の最初のトロツキスト中核の構成の組織上の弱さは五七年に至って爆発した。黒田寛一君は公然と日本支部準備会から分離した別箇の思想的政治的グループを結成した。彼が準備会の指導部の一員であるにも拘わらず、である。このグループは別箇の組織別箇の戯政、別箇の機関誌（探求）、別箇の理論を発展させてきた。それは探求第3号における黒田君の「第四インターを与提案」して新しいインターナショナルをつくれという宣成された五八年六月の早大新聞紙の同君の第「宣言」において四インターはスターリニストであるという公然たるトロツキストの絶縁状となって爆発した。実質上これは黒田君とそのグループの第四インターとの分裂宣言に他ならなかった。

このとき、この探求派による分裂宣言を追及し、大胆に彼らの挑戦に応じ、トロツキズムの旗を守り抜くことが要求されていた。この任務を果すために、日本支部準備会の書記局のK・Tは、早大新聞紙上の黒田論文を公式に批判する声明が否決されたのち、それを撤退して、七月、日本支部の再組織委員会を結成した。そのメンバーは四名であった。これに対し探求派は三十名近いメンバーを堆積していた。一見して再組織委員会側の敗北は疑いないかのようである。

関西においては、探求派の影響は皆無であった。この事情が関西のトロツキストをして黒田君の分裂宣言の意味を過少評価せしめた。彼らは探求派のことばの上だけの忠誠表明を重視し、その行動における分裂に目をふさいだ。こうして彼らは、ここに何ら原則上の相違はないと称して探求派の分裂策動を助長させる調停主義的方針をとるに至ったのである。更に彼らは探求派と再組織委員会の関係からから判断して、もし探求派と分裂すれば（？）――正しくは事実上の分裂を確認するにすぎないのだが）再組織委員会のグループは小さいセクトになってしまうだろう、という脅迫的警告をさえ行った。

だが、真実には、我々はここでは数の問題ではなくて、質の問題を、すなわち真にインターナショナルの組織の――としての中核を確立するという問題を取り扱っているのである。我々は五六年十月にその最初の中核をつくった。そのメンバーは八名であった。だがこの中核が最後的に安定するためには、我々は五七年夏の山の分裂、五七年秋～五八年夏の探求派の分裂という代価を必要とした。これらの真質的雑草、偶然にトロツキズム運動にまぎれこんできたセクト主義者、夢想家、策謀家たちとの一連の分裂は、第四インター

（四）

ナショナルに忠実な同質的中核を育て上げるための不可避的な正常質なのであった。五八年七月に我々がこの同質的中核をついにつくり上げることに成功したとき、我々は四名であった。関西の同志たちは分裂を厳いかくす調停者の立場をとった、東京においても若干の人々は疑い深そうに頭をふった。探求派は日本支部準備会の一切の機関を手に入れた。だが、我々はこの人々は日本トロツキスト運動にとっては単なる一時的なあぶくのような存在にすぎぬことを確信していた。なぜなら、彼らはすでにレーニン、トロツキーの革命的伝統を放棄しており、この歴史の潮流のかたわらに彼自身の亜流を「創造」しようと固く決意していたからである。彼らはこの目的の達成のために一時彼らに好都合な間だけ第四インターナショナルの名前を借りておく戦術をとったのである。このような人々とのいかなる内部討論も説得も無駄におわることは不可避であろう。このことは探求派のすべての活動の中で見まちがえる心配のないほどはっきりと公式に示めされていたのである。だから我々はこんどこそ真のトロツキスト中核の結成に成功するであろうという確信をもって探求派との分裂を確認したのである。

(7) トロツキスト指導部としての日本支部準備会指導部の完全な空中分解と政治的破産

七月の分裂の確認の後ほんのしばらくの間探求派は第四インターの旗の利用価値をみとめていた。彼らは準備会の指導部を占拠したのであるが、しかしその機関紙については、八月号を休刊させた。九月号には、この分裂に関する草共同政治局の声明がのせられている。この声明は再組織委員会の行動を反レーニン主義的トロツキー的分裂行動であり、トロツキー故条主義であると非難し、「第四インターナショナルの旗の下に結集せよ」（！）と呼びかけている。なるほど!! これほどに図々しく構えることは容易ではない。二の第四インターの旗を利用して探求派が水を自分の田に引いていることは明らかである。PCI（フランス支部）の政策をめぐるこの声明の見解がその後学生の革命的左翼の一部によって第四インターの破産を証明する材料に使われたであろうことは推察に難くない。探求派の分裂宣言の他の内容（反帝反スターリニストの彼らの戦略、第四を揚棄した新しいインタナショナル）については、鉄面皮にもこの声明は一言もふれていない。それも不思議ではない。探求派は第四インターの旗をもとに第四インターを破壊する自由を要求し、この自由を拒否するかどで正統トロツキストを誹謗し第四インターの旗のもとでその破産を宣伝することが彼らの目的にとって有利であると考えていたのである。このような我が国のトロツキズムの歴史にぬぐい得ない汚辱をのこした「政治局声明」に署名したかべて人々は正当なその責任を負わねばならぬであろう。

だが、探求派は関西の同志たちの要求によって若干の箇所を修正しなければならなかった。このことは探求派をいらだたせた。それは彼らをして「第四インター旗」の利用価値に重大な疑いを抱かせた。それと共に、彼らの内部には、第四連、中国＝ダラクしたが仲者国家であるというトロツキストのテーゼに対する疑問がますますつよまってきた。黒田寛一君は対馬忠行と宿んで一体になり、革共同の内部情報まで逐一黒田君から対馬に通報されるような事態に至った。この傾向は、探求派の中での偽りの第四インターへの忠誠のベールをはぎとらせずにはおかなかった。彼らは完全に機関紙の発行という任務を放棄した。八月、十月、十一月、十二月とトロツキストの公式機関紙はあらわれていない。革命運動のきびしさを知る者にとって、この事実だけでもすでに十分すぎるほどのことを物語っている。一つの独立の革命運動にとって、機関紙がストップするということは容易ならぬことである。機関紙の放棄によって、探求派は第四インターの旗を放棄したのである。運動の継続性に最大の力点をおかねばならぬ革命家にとって、それはもはや運動にたいする直接の裏切りである。だが探求派にとってはこの問題はすこしも深刻ではない。彼らはすでに自分の機関紙をもっている。問題は自分たちの努力をのばすために第四インターの旗を利用できるかどうかということなのである。関西の同志たちの抵抗によって革共同の機関紙を自由に彼らの目的に利用できないことが分ると、彼らは平然とこれを投げすてたのだ!! すくなくとも我々はこのような事態を平静な感情で見ていることはできない。

探求派の他の一部は、革命的左翼の間で自ら第四インターナショナルの破産の墓掘者の役割を買って出ている。その他の人々は我々の予測したように書斉派的傍観者ないし賃金術師の様相を浮び上らせている。全体として、探求派は独自の政治的潮流としては消滅した。残るはトロツキズム、スターリニズム、改良主義からそれぞれ相応の断片を寄り集るアイレッタントたち、即興的新理論の創造者たち、不平分子の間の合従連衡に日を送っている陰謀家たち……である。このなかのは不可避であった。これ以外の結果を予想することは余りにも近視眼であった。

(8) トロツキスト同志会の活動

八月から十二月までの五ヶ月間にトロツキスト同志会は四十八種類のパンフレット、リーフレット、ビラを発行した。これはこの五ヶ月が政治的激動期であったことを考えると決して十分な数字ではない。まして各印刷物の発行部数が大衆運動の中では言うに足りぬ僅かなものであったことを考えに入れるならば、我々の仕事はその課題にくらべて絶望的に力不足であったことをみとめなければならぬ。だがそれにも拘らず、二月から六月に至る五ヶ月間に革共同書記局が等うじて十種類のリーフレット、ビラを出したにすぎないことと比較すれば、進歩は歴然としている。これは組織の質の差異を教えているのである。革共同（東京）には政治活動に献身する人々が殆んどいなかった。それは政治組織というよりはむしろ討論クラブであった。同志会は明らかに革共同（探求派）よりもずっとすくないメンバーで六月までの五ヶ月間よりも五倍多くの出版物を出す力があることを証明した。これに対して探求派の支配下の革共同書記局は八月から十二月までに僅か二点（!!）の出版をしたにすぎない。九月中旬以降は彼らはなにも出してはいない。

同志会は何よりもまず政治情勢の討論と方針の提起に主力を置いた。このように組織を推しすすめることによって我々は討論クラブと陰謀家の寄合世帯にすぎなかった従来の革共同とは全く異った タイプの組織をつくることに成功した。我々は全生活を政治活動を中心として組み立てることのできる基幹部、それは当面一握りの数にすぎないが、からなる組織をつくりはじめた。つねに政治情勢を検討し、方針を打ち出し、大衆運動の中にこれを持ちこむこと、もちろん可能な範囲ではあるが、政治活動に献身すること、これが同志会の気風となった。全日本を相手としてこれを征服しようとする革命的少数派たる我々のグループにとって、このような献身の気持ちのよいおしゃべりにうつつを抜かしている探求派とは異っていなくして一瞬でも存在を続けることは不可能である。だが、第四インターナショナルへの真の忠誠なくして献身的活動はけっして考えられない。こうして探求派のようなおしゃべりの名手たちがどれほど群っていようとも、革命運動は一センチでもすすむわけにはゆかぬのである。

我々は組織活動の基本的路線を、まず大衆運動の中に独自の政治方針をもちこみ、その中の一定の力に政治的影響を与えること、次にこの影響を組織的にうちかためる、ことにあると考え、またそのように実行した。この方向によって独立活動も加入活動も推しすすめた。これこそ関西の同志たちがすでに五七年春以来実行し、成果を収めてきた方法であり、長い間東京でも実行されべく待ち望まれてきた方法なのである。五六年十月の最初の中核（関東）は、或いは政治活動の能力をもたず、或いは原則問題で第四インターへの忠誠を失い、さいごに探求派が自ら第四インターへの絶縁宣言を打ち出すに至って、ついに五八年八月、東京のトロツキストグループは運動の出発点を見出し、それをたぐれば事態が切りひらかれてくるはずの糸口を見い出すことができたのである。

(9) 独立活動と加入活動の正しい結合の問題が五八年秋以降提起されている。

過渡的要求のための斗争はそれを完全に実現するための斗争とその労働者と農民の政府樹立というスローガンによって導かれねばならぬ。このスローガンは、もし大衆によって彼らの今あるがまゝの組織――しかも資本家政府をたおすために戦いつゝある――と何らの関係もなしに提出されるならば、決して加入活動と結びつくことはできない。従って、独立活動と加入活動は相互に無関係で内容的に同一なものとなり、必然的に一切の加入活動の意義をうばいとるであろう。大衆の革命へ向う行動を押しすすめるのではなく、中核組織の漸次的拡大という事態のテンポに全く合致しない路線がとられるだろう。この路線を通じて何時かはトロツキスト中核が大衆政党となり、こうして大衆のまえに、『トロツキストの政府をつくれ』と呼びかけることのできる日を待つことになるであろう。トロツキスト同志会はこのような路線を採らなかった。我々は下から、ゼネストへ発行する部分重点ストのイニシアをとり、それを上部機関に承認せしめよ、こうしてゼネストを以て政府をたおし、ゼネストを実行した大衆の組織を以て政府を樹立せしめよ、と言った。このように提起することによって我々は加入活動の発展のための広汎な余地を用意したのである。既存の組織にある我々の基幹部は、大衆の中で、『我々のこの下部組織をして斗争の突破口を切り開こう。このイニシアティブを上級組織に承認させ、支持させ、横に拡大させよう。』こうしてゼネストに入らせ、政府をたおし、我々自身の組織の手に権力を掌握させよう。』と訴えることによって、小サイワルの中ではなく、戦っている大衆の中で革命への宣伝煽動を行うことができる。それを既存組織の枠の中でできるのである。我々はこの数ケ月に、上からと下からの活動をこのように結びつけることの必要を理解した。この教訓を学び正しく適用することが次の時期の問題となるであろう。

だが、まさにこの問題で多くのトロツキストは方向を見失った。彼らは独立活動と加入活動をこのように正しく理解することができなかった。（次頁へ）

鶴敬覚任務展望の為機会は我々が独立活動と組織加入活動の関係を正しく理解し、正しく実行できる為否分析分析ている。我々が政治組織としての活動を開始した五八年以降、この問題は始めて現実に解決を要する問題として我々の面に日程にのぼってきた。

トロツキスト中核の任務は二重的である。それは一方では上から労働者階級に革命的方針を与え、他方では下から既存の労働者組織の中で大衆を革命に動員せねばならない。この上からと下からの二方向的行動に正しい均衡を与えることこそ組織活動全体の中枢でなければならない。この問題の理論的一般的理解については後段で述べるとして、ここでは過去数ケ月に具体的にあらわれた諸問題についてふれなければならない。

トロツキスト同志会の基幹部はこの数ケ月に上からの独立活動をいかに推しすすめるべきかを学びとった。独立活動とは本質的に、革命的方針の旗を大衆の中に押し立てることである。だが、この方針をどのような組織で大衆が実行しなければならぬかを大衆のまえに明らかにしないかぎり、この上からの活動は決して下からの活動と結びつくことはないであろう。なぜなら、大衆はすでに我々以外の勢力によって組織されており、この組織はそれぞれの機構と方針を大衆に与えているのであり、この機構から単に分離するだけでは大衆を動き出させることはできないからである。他党内にいる我々の基幹部は本質的には上から行動することはできない。我々は下から一定の政治方針を指導に対置させ、それのもとに大衆をこの組織を通じて動員させねばならない。それゆえに、我々の上からのアソピールは、必ず、諸君の指導部をしてしかじかの方針を実行させよ、諸君の組織をしてしかじかの方向にすすませよ、ということばで結ばれねばならぬ。まさしくこの点でそれは下からの行動と結びつくのである。下からの活動の基本的性格は、既存の党の枠の中で大衆を左へ向ってまず部分的に押しやることである。党の下部組織をして指導（局地的に）部とは異った方針で行動に立たせることである。この下からの行動へのイニシアをとることこそ、加入活動の真実の目標とするところである。だが、この下からのイニシアはそれが上からの指導を受け入れ、首尾一貫した革命的方針を把握し、革命的政治組織の内部で訓練されている基幹部によってとられるのでなければ、大衆の革命的エネルギーを最後まで発展させることはできない。この点で下からの活動は独立活動と結びつくのである。

我々の独立機関紙はこのような観点を堅持した。この方法の集約的表現が警防法反対国民会議に責任を負う労働者と農民の政府というスローガンに他ならない。このスローガンの内容については政治情勢テーゼが説明を加えているので、ここでは独立活動と加入活動の関係の見地からふれる必要があろう。我々の独立活動の方針の要約は労働者と農民の政府をである。一切の

トロツキスト同志会以外のトロツキストはこの点で種々様々な混乱を巻き起した。彼らの主要な誤謬は既存の組織の内部で独立活動を行おうとする所にある。それゆえに必然的に真実の独立活動は放棄される。彼らは既存組織を利用してそれをやりせようとする。この実例はここでは挙げることができないが、このようなやり方では不可避的に我々の一切の活動が四つの壁の中に閉じこめられた、小範囲の、純理論的な問題に還元されてしまうであろう。そこでは唯一の目的は我々の小サークルに追加の数人或いは数十人を獲得することになってしまうであろう。このようなやり方はすでに第三回世界大会、第四回世界大会によって最終的に拒否されているセクト主義的な活動方針であって、我々は無条件にそれと断絶しなければならぬ。独立活動を既存組織の枠の中での活動と結びつけることができなければ、不可避的に加入活動は陰謀となるか、でなければはね上りとなる。それが成功しなければ——成功するはずもないが——彼らは必然的に加入活動は無意味である、加入活動の余地はない、と結論する。こうして、本質的には誤まったセクト主義である考え方、加入戦術はごく短期的のものであり、できるだけ早く独立の組織として打ち出さなければならぬ、という見解がトロツキスト同志会以外のトロツキストの中で普遍化しつつある。我々はこのような方針が第四インターナショナルの公式の路線と正面から対立しているだけでなく、それが我々の運動を袋小路に追いこむであろうと確信するがゆえに断乎として拒否する。

ここに提起されている問題は、既存組織の枠の中で活動し、不断にその枠を大象としてのりこえさせることにある。独立活動はまさしくこの過程を促進させるためになされねばならぬ。加入活動はそれを直接実行するのである。これ以外のいかなる方法によっても我々は大象を革命に向って動員することはできないであろう。これこそが第四インターナショナルの今日堅持する長期的加入戦術の内容であり、この方針に忠実なるもののみが今日の第四インターナショナルに忠実なのである。

(10) トロツキスト同志会と革共同関西ビューローのヘゲモニー下に再建された革共同の対立点。

八月以降黒田寛一君のヘゲモニー下にあった革共同書記局は全く空中分解し、政治的には死滅していた。十二月になってこの情勢に変化が生じた。黒田君の対馬忠行との結合がバクロされ、その政治的無能力ないしサボタージュが関西ビューローによって批判された。同志Fの明白に第四インターナショナルに不忠実な一種の裏切り行為がバクロされた。革共同中央は同志西らの関西ビューローの完全なヘゲモニーの下に再建された。これは歓迎すべき一進歩である。

だがこの再建の結果革共同がトロツキスト組織として立直るという十分な保証は一つもない。なぜなら、この再建は過去半年の政治情勢の総括、その展望、革共同の果して来た役割、その自己批判などについて予め試案が出され、全同盟員によるその討論の一定期間を経た上でなされたものでなかったからである。だが、四ヶ月に亘る政治的沈黙と離散ののちに、このような政治討論を行うことなしに達成された再建は、土台からして健全なものではあり得ない。

再建された革共同は何ら政治的同質性を持っていない。或る分子はソ連＝ダラクせる労働者国家説に反対している。或る人々は「新しい第四インターナショナルを考えている。他の人々は長期的加入戦術に反対している。独立活動と加入戦術の関係についてはすべての人々が混乱している。何よりもまず、この人々には政治的討論の気風が確立されておらず、合もかわらぬ小サークルの合従連衡主義が支配している。このような内容を持つ組織はトロツキスト組織として成長する出発点とは成り得ないであろう。ところが今必要なことは、種々の異質的分子を「統一」することではなくて、将来大衆的政党に成長しうる同質的な中核をつくることなのである。その同質性が証明されていない以上、策略と取引きによって寄せ集めるのでなく、政治討論を通じて、この同質性を表現しなければならなかった。我々はこの道をすすまなければならぬ。そこでトロツキスト同志会は革共同再建のために「革命テーゼ草案」、「政治情勢テーゼ」「至過報告」並びに当面の組織活動方針」の三つの試案を提出し、それらの討論を通じてトロツキスト同志会と革共同関西ビューローを中心として再建をすすめるコースを提起したのである。

だが不幸にして関西ビューローの同志たちは七月の誤謬をもう一度繰り返したかのように思われる。彼らは、我々の提案を拒否した。それゆえに当面、二つのトロツキスト組織が並存し、競争し、対立することにならざるを得ない。この二つの組織の政治的対立点を明確に規定することが必要である。あらゆる組織上の分裂はその基底に何らかの政治的見解の分裂がひそんでいるのであり、その明確化は分裂の克服のための必須条件だからである。

(a)、加入戦術について。我々は独立活動と加入活動の結合を第四インターナショナルの方針に従って理解する。そこから当然、我が国では基本的には社会党への加入戦術をとり、当時一時的短期的のみ共産党への加入戦術をとる。すべてのトロツキストは原則として社会党（或いは共産党）の中で積極的に活動しなければならぬ。これにたいし、革共同は長期的な社会党への加入戦術に反対である。できるだけ早く主力を独立活動に向けさるべきであるという見解である。

(b)、社会党政府或いは社共政府のスローガンについて。我々はこれに賛成である。我々は社会主義的にでなく、大衆の斗争組織に責任を負う社会党という

形で提起することによっての外、独立的活動と加入活動を結びつけることができる、すなわち革命的宣伝を大衆運動と結びつけることができる、と考える。これに対し革共同はそれに反対である。そのようなスローガンは改良主義者への幻想を助長し、トロツキストとして彼らへの圧力団体に転化せしめる、という見解である。

(C)、フランス支部が社共政府というスローガンを出していることについて。我々は賛成である。それは第四インターナショナルの現在の基本方針の核心をなすことであり、これを理解することなしにはトロツキストたり得ないという考えである。革共同は反対である。そしてこのスローガンのゆえにフランス支部は親スターリニスト的であるという黒田寛一君の批判に対しては原則として反対ではない。

我々は革共同の見解をセクト主義であると考える。関西ビューローは一層緩和された形態でこれらの見解を主張しているが、しかし正しい主張に時として近づくこともあるので、我々は彼らを基本的には調停主義であると規定する。それゆえに再建された革共同はいぜんとしてセクト主義と調停主義の連合であり、その中で調停主義の比重が増大したと考えられる。それゆえに、我々はトロツキスト同志会の活動を強化することによって、革共同が最後的にセクト主義の残滓を一掃し、正しい政治方針に到達する過程を促進するであろう。このようなやり方によってのみ真実の統一戦線が達成されるであろう。

(八)

二、当面の組織活動方針

(11)　我々の組織活動の基本的定式は、まず我々の政治方針を提起して一定の大衆の層を政治的影響下におき、つぎにその中の一部分を組織的に獲得し、最後にこの人々を教育する、というのではなければならぬ。耕やし、刈りとり、精製する、――これが基本的な要素である。それゆえに、何よりもまず、正しい政治的方針を提起して大衆の中にもちこむことのできる最初の中核がなければならぬ。この中核は相対的に広汎な大衆を独立活動と加入活動の両方の方法によって影響下におき、一定数の新しい分子をひきつけ、この人々を教育して彼ら自身が政治的宣伝煽動を行いうるようにしなければならぬ。この過程が拡大再生産されることによって我々の組織活動が行われるのである。宣伝煽動、組織、教育、この三つの要素が有機的に結合されねばならない。すなわち、この各々の要素が自らの中に他の要素を内包するような形であらわれるべきなのである。

宣伝煽動が情勢に合致していなければ、何ら直剣な組織活動は問題にならない。合致しているならば、我々は組織外の大衆を動かすことができるであろう。彼らの中にもっとも意識的な部分を組織に加入させ、彼らをして大衆の中で正しい宣伝煽動を行いうるように教育すること、我々はこのように活動をすすめなければならない。

(12)、独立活動を整備し、強化しなければならぬ。独立活動の主要な武器は機関紙（労働者の声）、機関誌（永久革命）、パンフレット（トロツキスト文庫その他）である。労働運動のために「学生の声」を定期的に刊行する必要があるだろう。この他に大衆集会に対する不定期のビラを引き続き強化しなくてはならぬ。

独立出版物の主要な役割は組織外の先進的労働者、学生、社会党員、共産党員の中に革命的方針を直接持ちこむことである。個人的連絡のある範囲ではなくて、我々の力の許す範囲で大衆の中に直接訴えてゆくために独立出版物が活用されるのである。我々の組織が小さく、地方的であるために基幹部の数は機関紙の数よりもはるかに小さく、従って機関紙の配布方法は主として無料送附と無料配布にならざるを得ない。基幹部の拠金と奉仕によって支えられるこの方法は、我々自身の高度の献身と第四インターナショナルにたいする忠誠なしには不可能である。我々は他の国々の同志たちの比類ない革命的献身にはげまされ、彼らと共に社

会主義革命の世界党を築き上げる道に今入りこもうとしている。ペルーの同志が言ったように日共産党や社会党の官僚たちがそれぞれ依拠すべき官僚的層をもち、そこから彼らの組織、財産を汲み出すのと異って、トロッキストは我々自身が力をふりしぼらないかぎりどこからも力は生まれない。のである。単にトロッキズムを承認するだけでは、何らトロッキストの名に値しない。全精力を、すべての政治的余裕をトロッキストの運動――独立活動であれ、加入活動であれ――のために実際に傾注する献身的能力を能力を証明したもののみがトロッキストという名誉ある名称で呼ばれうるのである。基本的にはこのような基幹部の努力こそが独立活動の基盤である。

機関紙（労働者の声）は八月十二日に発刊して以後

十～十一月に三回休刊せざるを得なかったが、十五号（十一月十八日）からは毎週定期刊行を実現した。トロッキスト機関紙の過去の実績で週刊が継続したのは五七年五月から七月までであったが、この時期には政治新聞というよりはむしろ翻訳を主とした理論的出版物であったこと、政治的に我々自身の集団的な努力によって支持されてはいなかったこと、これらの事情を考えると、我々が五八年八月以降なしとげてきた成果は大きな進歩である。いかなる条件下でも発行を継続しうる堅固な体制をつくり上げることがなを我々の任務として課されている。このために機関紙を党責任者を任命し、その指導下に、編集・印刷・配布の技術的系統を確立しなければならない。

当面中心的に日程にのぼっている問題は配布である。我々は従来主として学生の間に配布網をひろげてきた。この学生内への配布の水準を維持しつつ、次の時期には労働者の間に組織的に配布網を拡大しなければならぬであろう。もちろん我々の力は限られているから、まず、もっとも戦闘的な先進的な労働者の中には機関紙が定期的にもちこまれねばならぬ。戦闘化しつつある部分にたいしても機敏に送配布できる体制をつくること。京浜地方の拠点労働者組織にたいする持ちこみのための特別の指揮系統をつくることができるであろう。この仕事のために必要なことは不撓不屈の根気である。我々の組織の学生の基幹部はこの仕事を通じて先進的労働者と接触し、彼らと共通のことばで話し合う仕方を学ぶだけでなく、彼らを通じて労働者大衆の気分の変動を敏感に把握し、それに対応した宣伝煽動を行うことを学ぶであろう。この活動のための責任者できめ、その下で原則としてすべての学生基幹部が何らかの程度でそれに参加する方法がとられることが望ましい。労働組合への送配布、拠点党員の門前の販売などが主たる方法となるであろう。このようにして我々の機関紙を新しい層へと拡大しなければならぬ。この任務を次の時期に果さねばならない。これこそが我々の影響を学生から労働者へと拡大するための基礎的な前提条件である。我々は個人的連絡をたよりにして労働者を獲得しようと考えてはいない。そのようにしては決して成功しえないであろう。まず、もっとも戦闘的であり、それゆえに革命的方針を飲えるように求めている労働者の一定の層の中にトロッキズムの旗を持ちこもう。彼らは最初は我々の主張を決して受けつけないであろう。我々の機関紙を丸めてくずかごの投げこむかも知れない。だが執拗に彼らに訴えてゆくことによって、とくに彼らが悩んでいる問題の不明確さに鋭いメスを入れ、彼らにたいしてついかになすべきかを示すことによって、彼らをして否応なしにトロッキズムへの関心をたかめ、ついで我々に傾聴せしめ、我々のスローガンの一部を知らず知らずのうちに繰り返えさせるように仕向けることができるであろう。これこそ今日我々の目標としているところである。幾千の戦闘的労働者の間に我々のスローガンを持ちこめ。そのために全力をつくせ。知りつくしている友人を追いかけ廻し、策略によって彼をトロッキズムに引張りこもうとするな。

機関誌、永久革命については、八月下旬の創刊以来

十二月までに四号を出した。五号以下は毎月定期的に発行されるであろう。そのためには編集・印刷・配布の責任者が機関紙労働者の声の責任者とは別に任命されなければならぬ。この責任者は労働者とにらみ合せながら定期刊行のために我々の力を結集しなければならぬ。

機関誌は当然労働者の声よりも小範囲の人々に配布される。その任務は先進的労働者・学生の教育である。主要な内容としては、(イ)、政治情勢に関する定期的な、トロッキスト組織としてのテーゼ（三ヶ月に一度を原則とする）。(ロ)、個々の政治至高的諸問題に関する立ち入った理論的考察。(ハ)、各国支部の活動と理論。(ニ)、第四インターナショナルの公式声明、テーゼ。我々はこれらの諸問題のための著述活動へと我々の基幹部を教育し、訓練し、成長させねばならない。

機関誌の配布。学生から労働者へと配布網を拡大し、主として無料送配布の方法をとりながらも、機関誌の場合には次の時期には、ますます有料固定読者の獲得へと向わなければならない。このことは機関紙においても同様であるが、我々はまず流しこみによって大衆の中に我々の旗を押し立て、つぎに一定の層を我々の影響下におき、更にこの人々を我々の出版物の講読者にすることによってゆるい形でトロッキスト運動に結びつけなければならぬ。我々は今まで主として、或いは全く流しこみによっていた。その成果を刈りとることが具体的に日程にのぼっているのである。機関誌においてはこの任務が一層熟していると考えられる。あくまでも講読の問題をトロッキスト運動にたいする一定の自発的支持の表現として把握することが大切である。

労働者への流しこみにあたっても、機関誌の場合には明らかに重点を総評左翼反対派の個々の指導的人々

中堅の活動家に向けることが必要である。なぜなら、彼らは単に機関紙による宣伝煽動のみではなくて、詳細な理論的解明を必要とし、また要求しているからである。彼らの中への組織的配布体制をつくり出すことなしには我々の独立活動は今一歩前進しないであろう。このための責任体制を確立し、必らず次の時期にこの問題を解決しなければならぬ。

トロツキーの重要な諸著作がまだ出版されておらず、また以前出版されたものも大部分が絶版、品切れとなっている。トロツキーを研究しようとする気運の高まりに応じて、我々はぜひとも五ヶ年中にトロツキーの未刊主要著作（コミンターン最初の五ヶ年、レーニン後の第三インターナショナル、永久革命、フランスはどこへ行く、マルクス主義の擁護）を逐次刊行したいと希望する。この計画を実行するためには厳格な独立採算が必要とされる。それゆえ、我々の組織の中にこの出版活動に責任を負う基幹部を任命しなければならぬだろう。トロツキーの著作に重点をおきながらも、インターナショナルの重要な諸文書、理論的諸著作をも出版する任務が今後日程に上るであろう。

ビラ活動。これは独立活動においては基本的な宣伝煽動の手段の一つであるが、我々の活動の中でもっとも弱い部面でもある。もちろん、八月以前とくらべるならば、我々は八月以降大きな進歩をとげた。八月以前と異って我々は東京においてはトロツキスト同志会、関西においては革共同関西ビューローによって警察法反対斗争の中でトロツキストのスローガンが大衆会の中に持ちこまれたことを確認する。この最初の行動を飛躍的に強化しなければならぬであろう。この最初の行動を飛躍的に強化しなければならぬであろう。できるだけ多くの大衆集会、労働者組織の大会の中で我々のスローガンを明記せねばならぬ。ビラの任務は、当面は、大衆の中に我々のスローガンを持ちこむことである。こうすることによって大衆をして要約されたことばの形でトロツキストを他の労働者諸組織から区別させることができる。そしてこれこそ大衆が革命的方針に獲得される第一歩なのである。我々の力は限られているので、この形態での活動を今十分に発展させることはできないとしても、しかし今以上に拡大するための努力を系統的につみ重ねる必要があろう。できるならばビラ活動のための責任者をきめるべきである。どの集会にビラを出すかをきめ、ビラの原稿をかき、印刷し、配布する一貫した活動が一定の指揮系統のもとになされるような体制がつくられるべきである。

最後に、これらの諸活動を統括し、さらに加入活動の指導をも含めて、トロツキスト組織の書記局を確立する任務が残されている。トロツキスト同志会の六ヶ月に亘る活動を通じて、我々は高い政治的能力と行動性に富む基幹部によって書記局を構成する条件をつくり出した。我々は本大会が次の時期に我々の活動を推進することのできる書記局を選出するであろうと確信する。

(十一)

(13)、加入活動とどのように取り組むべきか。

我々の前に提出されている問題は、共産党内での活動から社会党内での活動へと重点を移行させる際に生ずる具体的諸問題を明確にし、またその解決のために一歩をふみ出すことである。

共産党内の我々の基幹部が一せいに何月何日を期して社会党に加入する、というようなやり方は正しくないであろう。それでは問題をとびこえることになり、本当に困難を解決することにはならぬであろう。我々の今日の條件は、次の如く規定されねばならぬ。

(一)、共産党学生細胞の中に我々は一定の力を持っており、さらに当面この力は増大しつつある。

(二)、しかし、この増大傾向は遠からず止むであろう。なぜなら、基本的には支配階級の圧力は突出した戦斗的学生に異常な規模で加えられており、この圧力は学生運動の中に右翼的改良的傾向（日共中央派）とその裏返しである極左的傾向（ソ連は労働者国家ではないとする論者たちを筆頭とする一派）の強化となってあらわれ、こうして真の革命的傾向に向おうとする層の予備は徐々に涸渇しつつあるから。もしこの事情を見ることなしに学生内部のトロツキズム化がいつまでも継続的に上昇してゆくと錯覚し、この幻想の中に我々の戦術を立てるとしたら、我々は破滅的損失を蒙ることに違いない。

(三)、学生運動は今小ブル的学生運動から労働者的学生運動への移行期にある。我々はこの移行のために全力をつくさねばならぬが、しかしこのことは日共中央の統制から完全にそれを切りはなすだけでなく（日共は、平和、独立、学生の至当要求という三つの柱を出しているが、いずれも学生の小ブル的一面を極度に誇張し、それに依拠している）、根本的には学生の小ブル性とその労働者性の上におく小ブル革命主義者の一派の克服によって可能となるであろう。

(四)、労働者はますます共産党と社会党の統一行動を求めている。だが日共中央の民族主義的路線は階級斗争の現場に働く下部党員を極度に困惑させ、こうして党中央からはなれさせている。それにも拘わらず、学生細胞の左翼の主流は今日に至るまで彼らの中に日共左翼反対派の旗をもちこむことに成功しておらず、むしろそれをサボタージュしている。我々は学生左翼に圧力をかけて彼らをこの方向に推しすすめるために努力しなければならぬ。

(五)、だがそれと同時に、大衆の左翼化の兆候は社会党内の新しい党内斗争の開始となってあらわれた。我々は日共中央にせよ、日共反対派にせよ、現実にこの左翼化をさらに先へおしすすめる力を持っておらず、

また次の時期においても持つことはないだろうと判断する。学生細胞の主流でさえもその力を持たずまたその向歴を提出してさえいない。それにも拘わらず、当面この動きこそ我が国の革命運動を前進させる上に決定的比重を持っていることを認めざるを得ない。

(六)、我々の現在の勢力は一にぎりの数であるけれども、それは学生運動を労働者的に転換せしめるために役割を果すことができる。だが我々の力では共産党内の労働者組織に組織的に滲透してゆくことはできない。この点で我々の加入戦術の利益はないのである。共産党の党構の強化が現在のみならず近い将来においてもこのことを不可能にしていると言えよう。この点で我々が四月の政治テーゼへ永久革命一号しの中で言及した学生細胞　組織的な至管細胞との交流の戦術は七回大会以降全く不可能となった。

(七)、労働者組織の主流を握る社会党の中では、我々の現在持っていどの勢力でも労働者の戦斗的分子との接触に関しては比較にならぬほど大きな活動の余地があるだろう。我々の基幹部は否応なしにまっすぐに労働運動の日々の現実に直面し、その中で活動することを学ばねばならぬだろう。

(14)、学生運動から労働運動へ。この目標は二つの道に沿って実現しなければならぬ。一つは学生運動そのものを労働者階級の予備軍の運動として発展させることであり、一つは学生の先進的部分を労働者の先進的部分と結びつけ、革命の先鋒隊をつくり上げることである。我々は現に持っている学生運動の基盤から単にとび出すような形態で労働運動に滲透してはならぬ。だが、我々の加入活動の重点は学生自治会として労働者諸組織へ社会党を含むと接触せしめ、とくに社会党の党内斗争の問題を大胆に取り上げさせ、積極的に学生を反右派斗争の中に動員することにある。この斗争を通じて我々の基幹部は社会党の戦斗的分子との接触をふかめ、彼らに革命的方針を打ち出し、広汎な討論をまきおこしてゆくべきであろう。このような形態こそ我々が共産党内加入戦術から社会党内加入戦術へと移行せねばならぬ時期にとりうる唯一の合理的な過渡的形態となるであろう。我々は共産党内学細胞の中で窒息させられてはならぬ。我々の動員しうるすべての勢力を社会党内の新しい動揺に向けて組織せよ。学生の中で右派と右派のとりことなった鈴木派を徹底的にバク口し、孤立させよ。この中で学生の左翼を社会党の戦斗的活動家と結びつけよ。

(15)、内部機関紙の問題。共産党内で可能な内部機関紙は分派紙の形態だけである。党下部組織機関紙を実質的に支配する可能性は消滅した。だが分派紙を我々のみで発行する力は明らかに不十分である。独立紙と別箇の配布組織を維持することは不可能であるし、そうでなければ分派紙の発行の理由がなくなるであろう。

内部機関紙の役割は主としてその党の枠の中で最大限に左翼的な方針を打ち出し、一般的には独立機関紙よりも広汎な層に持ちこまれうるものである。労働党、社会党への加入戦術をとる場合には内部機関紙が主たる役割を果すのが通例である。だが我々はこれらの問題を我が国の運動の至験にもとづいて正しく解決しなければならぬであろう。至験は我々の独立紙が情勢の全面的評価と革命的方針を打ち出すと同時に、多かれ少かれ局限された、しかし一層具体的な任務へと共産党員或いは社会党員を動員する内部紙の必要なことを教えた。どのようにしてこの内部紙をつくり出してゆくかという問題にとりくまねばならぬ。

現在の我々の立場とその力では、共産党の内部紙と社会党の内部紙を両方出すことは不可能である。また何れか一方せよ。独立紙と別箇の配布系統を維持する力もない。それゆえ、次のような解決策が考えられるであろう。すなわち、共産党員と社会党員の有志が共同で編集する週刊紙を我々のイニシアで発刊することができ、また両党の問題を党員としての立場から論じてゆくこともできる。こうして今我々のおかれている状況とその方向に合致した形態で内部機関紙を地についたものにしてゆく可能性が出てくるのである。この機関紙は時事解説、党員としての党中央への批判、党員たちへの提案、手紙などを掲載し、できるだけ広範な、意識のそれほど高くない層をもまきこんでゆくべきであろう。この過程で編集部の中に実質的に我々以外の系統の社会党員、共産党員をも引き入れ、その基盤を拡大し、配布網をひろげねばならぬ。この点においてはピーター、フライヤーのニュース、レターの集が参考になるであろう。フライヤーはハンガリー革命の衛星で英国共産党を脱党した幾十人の労働者、該人を共同編集者としてニュース、レターを発行しさいきんではそれはTUCの左翼反対派の中心となる所まで成長している。このやり方をある程度我々はまねることができるであろう。我々はトロツキストのみの固定した枠の内部機関紙ではなくて、社会党や共産党の下部労働者にも積極的に紙面を提供し、彼らに発言させねばならぬ。

(16)、財政。トロツキスト党組織に入る同志たちは全財産を党組織に委ねるべきである。これがトロツキスト運動の国際的伝統であったし、また我々はそれを日本の伝統にしなくてはならぬ。党組織が各同志の収入の中から生活に必要な額を決定するであろう。収入が多いほど党組織に拠出すべき比率は大となるであろう。それゆえ、月収の五%という党費規定は最低水準であるとしなければならぬ。我々は党に対して各同志の最高の献身と忠誠を要求する。「……」それを必要とするからである。この忠誠は精神的であると同時に物質的にも表現されねばならぬ。（十三頁につづく）

（十一）

規約（草案）

前文

第四インターナショナル日本支部・国際主義共産党（以下第四日本支部と略称する）は、日本の労働者階級の前衛である。その根本的立場は第四インターナショナルの綱領と政策に結晶している正統ボルシェヴィズムの理論である。

第四日本支部は永久革命とプロレタリア独裁の戦略目標をかかげ、日本において資本主義制度を変革し、社会主義制度を打ち立てようとする労働階級の斗争の先頭に立つものである。この斗争において、日本の労働階級は復活せんとする諸の労働階級、及び斗争しつつある中国及び人民民主主義諸国の労働者、さらに全世界の労働者と団結し、提携して、社会主義の確立にすすむであろう。第四日本支部はこの世界的規模の斗争の第一線に立つ第四インターナショナルの各国支部と協力し、団結して、日本の社会主義革命のために斗争し、前衛に立つ世界資本主義を追撃し、もっとも急速な世界革命の遂行のために、戦場に立つものである。

第四日本支部はそのおかれた正史的条件のゆえに、大衆的革命政党としてではなくて、小さな理論的・中核的グループとしてここに誕生した。われわれの当然の義務は、正統ボルシェヴィズムの理論的伝統を確立すると共に、全力をふるって戦斗的大衆運動の中に浸透し、将来の革命的大衆政党の基幹部となるべき要素を結集し、鍛錬することである。われわれは正しい理論を把握する十分の可能性をもっている。だが、理論は実践の中できたえられ、適用されてのち、はじめて現実的有効性をもつことができる。われわれの任務は真実のボルシェヴィズムを日本の大地に根を生やした運動に成長させることである。

第一条　メンバーの資格

第四インターナショナルの綱領及び第四日本支部の綱領・規約を承認し、支部の一定の組織に入って、その活動に参加し、支部の決議に服従し、党費をおさめるものをそのメンバーとする。

第二条　加入の必要条件

第四日本支部への加入の目的には、第一条に規定された資格をそなえ、かつ正式のメンバー二名の推薦を必要とする。

第三条　メンバーの義務と権利

イ、メンバーの義務　第四日本支部のメンバーは第四インターナショナル及び日本支部の決定に服従し、自己のマルクス主義的階級意識の向上に努力し、大衆の革命的斗争の先頭に立ち、社会主義革命の前衛として活動する義務を有する。

ロ、メンバーの権利　第四日本支部のメンバーは第四インターナショナル及び日本支部の政策の決定に際して、完全に平等な権利を以て自己の意見を主張することができる。決定後は行動における統一を唯一の条件にして少数派は自己の意見を保留することができる。各メンバーは選出された一切の役員の政策及び行動を批判する権利を有する。

第四条　組織系列

組織系列は次の通りとする。総会――書記局――細胞。

第五条　総会

総会はメンバー全員によって構成され、構成員の三分の二以上の出席により成立し、三分の一以上のメンバー、又は書記局によって召集される。総会では、第四日本支部の基本方針及び重要事項の決定を行う。総会においては、委任状みとめられる。

第六条　書記局

総会は、第四日本支部の実際的日常活動の処理のために書記長及び書記局員若干名を選出する。書記局は暫定的に第四日本支部を代表して政治的、組織的に行動する。

第七条　単位組織

単位組織は細胞である。同一地域に五人以上のメンバーが存在する所では、書記局の承認を得て細胞をつくる。各細胞は書記及び必要な役員を選出する。幾つかの細胞は必要に応じ書記局の承認を得て細胞群ビューロをつくることができる。

第八条　統制事項

第四インターナショナル及び日本支部の決定に違反し、その階級的威信に対し、損害を与えたメンバーは

は当該機関の過半数の賛成を以て除名或いは権利停止処分に処される。但し、被処分者は異議あるときは一ヶ月以内に上級機関に提訴することができる。

第九条　財政

支部の財政は、各メンバーの収入の一％からなる拠金、事業収入、特別の寄金によって維持される。

（おわり）

〔十一ページよりつづく〕

機関紙財政。直ちに固定有料読者と云う形でトロツキスト運動への財政的支持獲得のキャンペーンを起さなければならぬ。我々は機関紙の流しこみ→政治的支持→財政的支持→組織的支持と云う過程で戦斗的労働者と学生の中に根を下さなければならない。そしてこのようにして我々の政治的周辺を拡大し、財政力をつよめ、組織を拡大することによってより大きな力で大衆の中に我々の旗をもちこむことができるであろう。

次の時期に我々は財政的基盤を安定させられるだけの具体的な固定購読者獲得の目標を決め、系統的にそれと取り組まねばならぬ。その具体的任務については書記局に一任する。

（一九五八・一二・二二）

おわり

附録

第四インターナショナル国際書記局

討論資料　第四インターナショナルからの手紙（一九五六年一月二〇日）

親愛なる同志諸君

われわれはれ月れ日のあなたの手紙を受け取りました。われわれはこの手紙によって知らされた情報に感謝します。われわれは第四インターナショナルの綱領の基盤の上に立っている一切の諸同志を統一して単一のグループを結成すべく準備することを声を大にして叫ぶものです。われわれは同志諸君の討論への一つの寄与として、われわれがなぜ独立のトロツキスト・グループを構成し、独立のトロツキスト機関紙を発行することを求めるかというその理由をここで説明したいと思います。

すべてのトロツキスト、革命的マルクス主義者は一般的理論的前提による国際的、国内的情勢の分析から出発する。四十年も前から世界の社会主義化への前提は熟していました。人類のひきのばされた危機をわれわれは一九一四年以来目撃してきました。それは二つの世界大戦の中に表現され、幾多の「局部的」戦争、すべての国における恐るべき至高的、社会的機危、更には無数の革命と反革命の中に表明されました。それは基本的には資本主義社会の苦悩を表現し、されにはこの死の苦悩をして社会主義の勝利へと導かしめるはずの労働階級の革命的指導部の弱さを表現しています。

われわれの綱領の最初の基本的陳述は、人間文明の世界的危機は根本的にはプロレタリアートの革命的指導部の危機であると述べています。この陳述は不可避的に世界中至る所の革命家の根本的任務はこの危機を克服することであると述べています。これは国際的労働階級のための新しい、適当な革命的指導部を形成することであるという結論に導きます。

レーニン主義的組織理論の基盤のおいては、この時期を通じて殆んど全ての国を悩ましている労働階級の敗北、勝利の喪失、局部的障害という悲劇的危機、更にはロシア（及び東欧）革命のスターリニスト指導部の官僚的堕落を克服しうる、これ以外の結論なるものは存在しません。

労働者階級の新しい革命的基幹部を形成はまず第一に正しいマルクス主義的綱領の洗練を必要とします。更にこの綱領の基盤の上において革命的基幹部を教育することを必要とします。われわれは第四インターナショナルの綱領、即ち過渡的綱領、及びわれわれの世界大会の綱領的諸文書、及びわれわれの綱領の不

可欠の一部分をなしているコミンターンの最初の四回の大会の主要な決議とテーゼ、同志トロツキーの基本的文献、これを全世界の労働階級の斗争の百五十年に亘る歴史の本質的、一般的教訓及びわれわれの時代の根本的歴史的政治的問題に関するマルクス主義の一般的理論を具体化していることを固く信じています。一言正確に云えば、われわれはオ四インターナショナル綱領の本質的部分を消化することはしには、動乱われわれの時代の革命的性格、資本主義死滅の性格、ソビエト国家と官僚の性格、永久革命の理論、労働者党として自覚の問題から出発してそれらの問題を解決するためには資本主義を打倒することが必要であるという結論に到達せしめるところの過渡的要求の戦術、革命的前衛の中核を革命的大衆組織政党に成長せしめる組織戦術、斗争を消化することなしには正しいマルクス・レーニン主義的政策に従う真の革命的組織を形成することは世界のいかなる場所においても不可能である、と確信しています。

若干の場合には（例えばユーゴスラビア及び中国）中間主義的諸党が例外的な事情のもとで革命的大衆斗争を勝利に導くことができたということは事実です。しかしこれらの諸党の歴史的性格は次の事実の中に表明されています。(一)これらの勝利は幾多の遅延と迂路の後に獲得されたのでした。そしてこれらはこれらの国の大衆に対して特に重い犠牲を負わせました。(二)これらの諸党の中間主義的コースは勝利の以前におけると同様に以后においても、大衆を幾多の日和見主義的混乱と転換に導き、これらの諸国の労働階級にきわめて重い、不必要な犠牲を負わせる所の誤謬をつみ重ねて来たのです。

勿論、根本的に反革命的な組織、何事からも学ぶことを知らず、革命への途を推進することを知らぬ組織よりは、幾多の試行錯誤の後に正しい方針を歴史的に発見する中間主義的政党の存在の方が好ましいには違いありません。しかしながら、マルクス主義的分析に基いて革命への正確な途を指示しうる真の革命的マルクス主義的政党を建設する方がなお一層好ましいことです。それによって中間主義と日和見主義の代価である所の無数の局部的敗北と誤謬とをその国の労働者に支払わせないですむことができるのです。それゆえ、すべての国においてオ四インターナショナルの綱領の基盤とオ四インターナショナルの組織の枠内において革命的基幹部を結集するという任務は世界中の一切の国に対して例外なしに適用さるべき普遍的任務であります。

革命的マルクス主義の綱領を体得することは、社会主義革命の世界党の肉体という民主的中央集権主義組織の枠の中において以外には不可能なことです。これを体得することは単に文献的教育、国際的労働運動の過去の歴史の全体を具体化している諸文書の読解と理解の問題にとどまるものではありません。それはまた、就中生きた日常の政治的、組織的斗争の歴史という問題でもあります。このような歴史なしでは真の革命的前衛を形成することはできません。

マルクス主義の綱領は諸法則の丸んだ箇条書ではありません。それは思想の生きた体系であり、絶えず新しい問題と歴史によって豊富にされているものです。こうした問題をマルクス主義の古典の原文の純粋な解釈の基盤において解決することは不可能です。こうした解決を階級斗争の不断の教訓と結びつけることが必要です。しかるに、そのことはわれわれが革命的組織としてのメンバーとしてこの階級斗争に現実に参加する場合にのみ可能となります。こうした問題を純粋に一国の枠内で正確に解決することもまた不可能です。それはただオ四インターナショナルの実践と討論を通じて消化されている国際的階級斗争の共通の歴史によってのみ解決することができます。

ユーゴスラビアや中国のような勝利した中間主義的諸党（共産党）の「国際政策」に関する悲しむべき歴史はこの法則の強力な証拠であります。ユーゴスラビアの同志は、ソ連以外のすべての労働者階級の政策国大会における我々報告が認めているように、ソ連の国家的利益へ理実にはフルシチョフの二十回大会しかしながらソビエト国家の真の利益と衝突するソビエト官僚の利益）に従属しなければならぬというスターリニストの旋を正しく批判することに乗り出しました。しかしながらこれらがドイツやイタリアやインドにおける彼らの少数の追ずい者たちに或る種の政治的助言を与えねばならなくなって見ると、彼らはスターリニスト官僚のやり方をそのまま適用する破目に陥ってしまったのでした。真の所はただ口シアをユーゴスラビアに変えただけのことです。これらは一九五〇年には朝鮮における所謂「国連軍」の反革命的戦争を支持しました。その理由は当時彼らがスターリンの軍事的長所を恐れていたからというのです。彼らはアメリカ帝国主義といわやついていた時分には、ドイツの再武装さえ支持したのです。今日ではクレムリンとのより良好な関係を得られたが故に、彼らは突然ポーランドの労働者の英雄的なポズナンの蜂起は「外国の挑発者」スターリニストの挑発者というなら本当でしょう）の仕事である、ということをも発見するに至りました。こうした純粋に日和見主義的な立場はそうした方針を適用しようとする色々な国の誠実な革命的労働者を誤らせるのみです。こうしたことは、首尾一貫したマルクス主義的綱領の欠如、一国にお

いてそうした綱領を案出することの不可能を表明しています。

一つの国において、第四インターナショナル綱領の基礎において、及び第四インターナショナルの組織の内部において革命的基幹部の中核を形成するという任務が一度び解決されるや、第二の基本的問題が提起されてきています。それはいかにしてこの中核を真の労働階級指導部、革命的大衆的政党に成長せしめるか、いかにして大衆を革命的綱領の側に獲得するかという問題です。経験はすでに組織された大衆的な労働階級の政治運動の存在する国では、革命的大衆政党を個人的獲得の途によって形成することの不可能をわれわれに実証しています。今日、われわれは五十人である。次の年には百人になるだろう。二年目には二百人になるだろう。五年の中には千人となる、等々。経験は、しかし全ての革命的大衆政党は実際上、完全にマルクス主義的革命的中核と現存する労働階級の大衆政党の内部において左へ動きつつある左翼中間主義的大衆的潮流との合同によって生れることを示しています。こうした方法によって第一次大戦後、全ての共産主義的大衆的政党が建設されたのです。将来の革命的大衆政党もまた、やはりこうした方法で建設されるでしょう。

しかしながら、われわれはこれら二つの問題の間に原則的な差異を設けなければなりません。所与の国において全てのトロツキスト組織、第四インターナショナルの内部に結集するという問題は原則の問題です。この第一のトロツキスト前衛のグループをいかにして所与の国の労働階級の真の指導部に成長させるかという問題は戦術の問題です。第二の問題は第一の問題が成功的に取り組まれない中は決して正確に解決することができません。社会党或いは共産党への加入、或いはその他のどのような戦術的機動にせよ、それが共通の政策によってしっかり結合され、インターナショナルと結合している革命家の原則的な、紀律あるグループによって指導されているものであるなら、それは非難さるべきことではありません。レーニンは革命的組織の緊密な団結の必要を力説しました。それは資本主義社会においては全てのマルクス主義者、全ての階級意識ある労働者がつねに資本家階級の客観的、主体的圧迫のもとにあり、資本家階級はこのプロレタリア階級意識を蚕食し、破壊しようとしているという事実から来るのです。客観的圧迫とは貧困、長い労働時間、教育の欠如、正確な情報の欠如、日常生活において資本主義とブルジョア国家の現実を〃受け入れる〃必要、等々であり、主体的困難とは学校、教会、新聞、ラジオ、映画、ブルジョアの政治宣伝等における誤れる教育であって、それらは幾多の誤った思想をばらまきます。

ブルジョア社会の中で活動しているのみでなく、さらに正確には敵意をもった政治組織（社会民主主義或いはスターリニスト）の内部で活動する革命的家のグループは、二重の圧力がさらされています。それに加えるにかれらは不断に今上に述べたような一切の客観的主体的な敵対勢力の的になっていきます。成功的な他党内活動とは、社会党或いは共産党の多くの会合に出席することを意味し、これらの党内で小分派を形成し、これらの党のイデオロギー的基礎である所のウソ、或いは中途半端な真理をくり返し、しすように脅かされ、われわれの信じていることを云わずに黙っていることを強いられ、真理の全てをでなく、真理の半分を語ることを余儀なくされる、等々ということを意味するものです。ルーズに組織されたグループ、インターナショナルとの組織的連絡から切りはなされたグループは、このような圧迫に容易に屈服してしまい、それ自身の意識の中に誤った、中間主義的な、日和見主義的な、或いは改良主義的な思想を持ちこんでくるものと思わなければなりません。新しい革命的指導部を建設するために日和見主義的な党の内部で活動するのではなくて、このようなグループはすみやかにそれ自身が日和見主義的セクト的になり、大衆組織の公式の腐敗した指導部に対する「左翼」として了るまうようになるのです。

大衆的政党内部の中間主義的グループの活動と、マルクス主義的革命家の入党戦術の間の差は、中間主義者が大衆的政党内部でより弾力ある戦術をとるという事実、かれらがかれらの言葉をこれらの諸党の内部にいる労働者の習慣に適応させるべく努めているという事実、かれらが長期の展望をもって活動しており、二、三百人の同志をひったくって大衆的政党を離れたりしないという事実、そうしたことにあるのではありません。こうした一切の点において、原則的革命的マルクス主義グループはいかなる中間主義的変節者よりも一層戦術的であり、一層柔軟であり、一層慎重であることができます。

真の相違は次の点にあります。即ち、革命的マルクス主義者はこれらの柔軟な戦術を意識的、計画的方法で、正確な目標に達する手段として追求すること。これらの大衆的諸党の内部において好都合な条件のもとで、何時の日か必ず出現するであろう左翼へ向う革命的労働者の大衆的潮流と、自分のグループの合同を準備すること。彼等は自分自身のグループの内部的生活（それはもちろう改良主義的或いはスターリ

ニスト的官僚の目から隠しておかなくてはなりません）を通じて、インターナショナルの文書の研究と討論を通じて、自国の政治的進化に対するトロツキスト的分析を定期的に下すことによって、彼等自身の革命的マルクス主義的意識を保持します。彼等はこうした大衆的組織の内部にせよ、或いは他のどこにせよそこで社会づた最良の同志を獲得することによって、自身のグループを強化しようと努めるでしょう。彼等は大衆組織の中で最良の労働者を、下部大衆の信頼を受け、未だ個人的に堕落していない分子を見つけようと努力します。そしてこれらの労働者に準備された、計画的な方法で影響を与えようと努力します。これらすべての目標は、公然たるトロツキスト機関紙の発行を不可欠ならしめます。もし入党が成功し、しかもグループが少数であるならば、おそらく一人又二人の同志が入党の可能性を弱めないために、公然とトロツキストとして現われることになるでしょう。しかし、こうしたことは戦術的問題です。もう一度言います。組織的方法によるトロツキスト組織、第四インターナショナルの支部の結成は戦術の問題ではなくて、原則の問題であるということを。

現在の正史的条件のもとでは、ドイツ、イギリス、日本のような国では、すなわち労働階級の大多数が社会民主主義的大衆政党の内部に組織されている所では、プロレタリアートの一般的急進化がベヴァニズムのような中間主義的傾向の中に、現在或いは将来の或る時期においてその政治的表現を見出すのはこれらの諸党の内部においてであります。これらの傾向の内部に、何百、何千という潜在的な革命的労働者と基幹部が出現するでしょう。これらの国における「入党戦術」の意味する所であります。しかしながら同時に、スターリニズムの側に獲ちとるために我慢強く活動すること、及、これらの国における「入党戦術」の意味する所であります。しかしながら同時に、スターリニズムの危機はソ連共産党二十、回大会以后尖鋭化しつつあります。これらの国においてさえ、共産党の多くの個人的メンバーはスターリニズムに反対的になり、トロツキズムに興味を持つようになっています。これらの同志たちを理論的政治的指導なしに流れるがままに任せておくことは一個の罪悪です。彼らはトロツキズムの綱領に対決させられ、それによって教育されねばなりません。これが、英国やドイツのようにわれわれの組織の一。。パーセントが社会民主主義諸党の中で活動している場合でさえも、これらの国において当面公然たるトロツキスト組織の機関紙の出現を尚一層必要とする理由であります。

結論に移りましょう。独立の（必要ならば秘密の）トロツキスト機関紙、第四インターナショナルの支部の結成、及び全ての国における公然たるトロツキストの機関紙の出現は戦術の問題ではなくて、原則の問題です。それは入党戦術と矛盾するものではありません。それ所及、それは結局においてこれらの戦術の成功的適用のための必須の条件なのです。

同志の挨拶を送る　四隊書記局　パブロ

同志へ

この書簡は十月三十一日に私の所へ届きました。重要な討討資料と思いますので、プリント、配布することにしました。十分ご検討下さい。（十一月三日　K・T）